

# 『明恵上人伝記』所収和歌注釈（三）

平野多恵

本稿は『明恵上人伝記』所収歌全25首中、⑬⑭⑮の9首に関する注釈である。⑬⑭⑮については『明恵上人伝記』所収和歌注釈（二）（三）『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第37・38集、二〇〇六・二〇〇七に掲載した。凡例および【語釈】【考察】で示した「④【語釈】」等の参照事項は、『明恵上人伝記』所収和歌注釈（二）（三）所載の凡例をご参照いただきたい。

## 〈凡例補足〉

前稿、前々稿の凡例で記載のない引用資料については以下に依った。『西行上人集』『西行物語』（久保田淳編『西行全集』日本古典文学会、一九八二）。

此聖人自前載ニクサくノ華ヲ植テ侍ケル。其華ノ盛ニ華ニソヘテ読テ奉リケリ

⑬ 植ヲキテ三世ノ仏ニ手向ケリ華ノ匂モ法ト思ヘバ

『伝記』巻上・四十六丁表裏（岩波150頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞・高慶四・高秀）○聖人―上人（興a・興b・物・穂・東水・慶文）○クサくノ―色々ノ草々ノ（東水）○植テ侍ケル―殖テ（興b）ウヘテ（物・穂・東水）種テ（慶文）○其華盛―なし（興b・物・穂・東水・慶文）○華ニ―なし（興a・興b・物・穂・東水・慶文）○ソヘテ読テ奉リケリ―読テ送りシカハ（興b・物・穂・東水・慶文）○植ヲキテ―殖置テ（東水）○手向ケリ―楊ケリ（興a）

## 【通釈】

この仏性聖人は自分で庭にさまざまな花を植えていました。その花の盛りのときに、花に添えて歌をお詠みになりました。庭に花を植えて三世のすべての仏に花を奉ります。（花だけでなく）花の匂いも仏法だと思われますので。

【語釈】○此聖人 仏性。⑭【語釈】「仏性聖人」。○前載「前栽」に同じ。草木を植えた庭。○クサく さまざま。○三世の仏

前世・現世・来世にわたって存在する無数の仏。○法 仏法。

【参考】◆『歌集』79、詞書「又彼上人、ミツカラノ前栽ニクサくノ華ヲウエオクトテ、二首」、三句「タテマツル」、五句「ミノリト思ヘバ」

【考察】花の香りも仏法だとして、折りとらず庭に植えたままで仏に花をお供えすると詠む。植えたままの花を仏に奉るという発想は「折りつればたぶさにける立てながら三世の仏に花たてまつる」（後撰集・春下・遍昭）によるもの。

## 上人御返歌

⑭ 法ノ為ニ植ラク草ノ種ヨリゾ妙法蓮華モ開ケシクベキ

『伝記』巻上・四十六丁裏（岩波150頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞・高慶四・高秀）○上人御返歌―なし（興a・東水）

返(興b・慶文) 返事上人(物) 返事(穂) ○法・教(興b) ○為ニ・タメ(興a・興b・物・東水・穂) ○植・殖(興b・東水) ○ヨリゾ・ヨリモ(興a)

# 【通釈】

上人の御返歌

仏法のために植えておく草の種から、すばらしい仏法も蓮華が咲き広がるように広がってゆくことでしょう。

【語釈】○妙法蓮華 仏のすばらしい教え(一乗の教え)を蓮華に喩えた。○開けしく 咲き広がる。

【参考】◆『歌集』81、詞書「返」、初二句「ノリノタメウヘヲクハナノ」

【考察】仏に手向けるため花を植える仏性に共感し、その行いが仏法の栄えに繋がると明恵は賞賛した。

松葉、禪門行円関東ヨリ上リテ在洛間、常詣デ、法談有ケリ。或時、読テ奉リケリ。

① 尋ネ来テ実ノ道ニ入ヌルモ迷フ心ゾシルベナリケル

【伝記】卷上・四十六丁裏(岩波150頁)

【校異】※当該歌なし(慶貞) ○行円―なし(高慶四) ○関東ヨリ―なし(興b・高秀・物・穂・東水・慶文) ○上リテ―ノホリ(高慶四) なし(興b・高秀・物・穂・東水・慶文) ○在洛間―なし(興b・高秀・物・穂・東水・慶文) ○常―なし(高慶四) ○有ケリ。或時、読テ奉リケリ―ヲキ、ヨメル(高慶四) 有ケリ或時

(高秀 有或時帰読奉ケリ(興b) アリケリ或時カヘリテヨミテ奉ケリ(興b・物・穂・東水) 在ケリ或時帰読在ケリ(慶文)

# 【通釈】

松葉の禪門行円が関東から上京し京都に滞在していた間、いつも上人のもとへ参上して法談をした。あるとき、行円が詠んで差し

上げた。

上人のもとを訪ねてきて真実の仏の道に入ったのも、もとはといえば煩惱に迷う自分の心が道しるべであったのだなあ。

【語釈】○松葉、禪門行円「禪門」は在家のまま仏教に帰依し、僧の姿となった男子。『吾妻鏡』正嘉元年(一二五七)四月十四日条に見える松葉次郎助宗法師法名行円か。『吾妻鏡』建保元年(一二二三)二月二日条には、將軍実朝に近侍するもののうち、芸能に秀でたものを選んで御学問所の番とした記事があり、「松葉次郎」は一番に名が見える。(平泉泚訳注『明恵上人伝記』講談社学術文庫175頁)。この学問所番の一番には、修理亮(北条泰時)や安達右衛門尉(安達景盛)のちに出家して大蓮房(覚智)も含まれ、

【伝記】や和歌で明恵に関わる人物が集中しており注目される。

また『吾妻鏡』正嘉元年(一二五七)四月十四日条には、松葉次郎らが太慈寺供養の相談をした記事が、同年八月十二日条には松葉入道らが將軍の命で太慈寺供養の前に方違すべきかを協議した記事が見え、正嘉元年には在家の身で仏門に入っていたことが知られる。建保元年『吾妻鏡』記事の名前表記からして、建保元年時点では未だ俗人であったと考えられることから、これらの贈答は、行円の出家後、つまり明恵晩年のものと推測される。『歌集』には、泰時や覚智との贈答も見え、いずれも晩年のものである。【伝記】が泰時と明恵との出会いを承久の乱後として記すように、行円と明恵の関係がはじまったのも乱後と推測される。○関東 行円が將軍実朝の側近とすれば、鎌倉か。○実の道 悟りへ通じる真実の仏の道。○シルベ 道案内。煩惱に迷う心が結果として仏道への導きになったということ。

【参考】◆『続拾遺集』(釈教・1395)、第三句「あひぬるも」、詞書

「高弁上人許にまかりて後につかはしける」

【考察】煩惱に迷う心を持っていたからこそ明恵を訪ねて真実の仏道に入ることができたと、行円は仏道へ導いてくれた明恵に喜びを伝えた。

#### 上人御返歌

⑳ 尋ネ来テ実ノ道ニ入ル人ハ此ヨリ深ク奥ヲ尋ネヨ

【伝記】 卷上・四十六丁裏(岩波151頁)

【校異】 ※当該歌なし(慶貞) ○上人御返歌―返哥(高慶四) なし(興a) 返事

(興b) 返事上人(物・穂・東永・慶文) ○尋ネ来テマヨヒキテ(高慶四) ○深ク  
―フカキ(物)

#### 【通釈】

明恵上人の御返歌

わたしのもとを訪ねてきて真実の仏の道に入る人は、これより深く奥を尋ねなさい。

【語釈】 ○尋ネ来テ実ノ道ニ入ル人 行円を指す。○此 今の状態。

【考察】 明恵のもとで真実の仏道に入ったと詠んだ行円に対し、明恵は、これで満足せず、さらに仏道を極めるよう勧めた。

#### 上人或時読給ケル

⑲ 夢ノ世ノウツ、ナリセバイカゞセンサメユク程ヲ待バコソアレ

【伝記】 卷上・四十六丁裏―四十七丁表(岩波151頁)

【校異】 ※当該歌なし(慶貞・興b) ○上人或時読給ケル―又上人(高慶四) なし

(興a・物・穂・東永・慶文) 上人或時(高秀) ○夢ノ世―世中(興a) ○イカゞ  
―何カ(興a)

#### 【通釈】

上人が、ある時お詠みになった歌

はかない夢の世が現実ならば、いったいどうすればよいのだろうか。仏法によつて夢から覚めゆく時を待てばよいのだ。

【語釈】 ○待バコソアレ 「待てばこそよくあれ」の略。

【参考】 ◆『歌集』35、詞書「秋日高尾ノ草庵ニコモリキルアヒダ、人ヲトタヘテ虫ノネノミサヘヅルユフベニ月ノ光ノ雲マヨリサソヒ、アラシノコエ松のコズヘニヲトヅレタルコ、チ、ナニトナク物アハレナルニ、世中アデキナクオモヒツゞケ侍ルフデスサミニ」 ◆『新勅撰集』釈教・626、詞書「なにごとかと申したりける人の返ごとにつかはしける」

【考察】 夢のようにはかない現実を冷静に見つめ、仏道によつて幻夢から覚めることを説く。『歌集』は、仏道の師であった上覚が明恵に遣った65「見ルコトハミナ常ナラヌウキ世カナユメカト見ユルホドノハカナサ」と明恵の返歌66「ナガキ夜ノ夢ヲユメゾトシル君ヤサメテマヨヘル人ヲタスケム」を載せる。

#### 上人ノ読給ヘルヲ聞テ、同禪門、又或時ヨミテ奉ケリ

⑳ 世ノ中ハマドロマデ見ル夢ナレヤイカニサメテカウツ、成ベキ此等、皆世間伝テ続後撰集続拾遺集ニ入ラレケリ

【伝記】 卷上・四十七丁表(岩波151頁)

【校異】 ※当該歌なし(慶貞) ○上人ノ―なし(興b・高秀) ト(高慶四) ト上人

(興a・穂・東永) ト聖人(慶文) ○読給ヘルヲ―読給ケルヲ(興a・物) なし(興b・高秀) ○聞テ―なし(興b・高秀) ○同禪門―禪門(高慶四) 禪門行円御返歌(高秀) ○又―なし(高秀) ○或時―なし(高慶四・高秀) ○ヨミテ―なし(高秀) ○奉ケリ―タテマツル(高慶四) なし(高秀) 奉読(物) ○此等―上人此哥□感歎

シタマヒケリ、此等（高慶四）上人此哥、頻々感歎シ給ケリ、此等（興a）是等（物）○皆世ニ聞伝テ皆□□テ（高慶四）皆聞伝（高秀）皆世聞侍（物）○人ラレケリ入レリ（興b）被入ニケリ（穂・東水）

# 【通釈】

上人がお詠みになったのを聞いて、松葉禪門が、またあるとき詠んで差し上げた

世の中はまどろまないで見る夢なのでしょうか。どうやって覚めれば現実になるのでしょうか。

これらは、皆世の中に聞き伝わって、続後撰集と続拾遺集に入れられました。

# 【語釈】○同禪門

↓①⑨【語釈】「松葉禪門行円」。○続後撰集続拾遺集 当該歌は『続後撰集』に行円詠として所載。『続拾遺集』に入集するのは①⑨の行円詠。

【参考】◆『続後撰集』雑下・1243、詞書「よのなかはかなくおぼえければ」

【考察】俗世のはかない夢から抜け出して現実に目覚める方法を問う。

又ナクナリタリケル人ノ手跡裏ニ光明真言ヲ書給テ、奥書付給ケル

# ②③

書ツクル跡ニ光ノカ、ヤケバクラキ闇ニモ人ハ迷ハジ

【伝記】卷上・四十七丁表（岩波151頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞・高慶四）○又一なし（興a・興b・穂・東水・慶文）○ナクナリタリケル人ノ無<sub>レ</sub>成<sub>ル</sub>人（興a・興b・物・穂・東水・慶文）○書給テ書（物）○書付給ケル―書付給ケリ上人（慶文）

# 【通釈】

また、亡くなった人の筆跡の裏に光明真言をお書きになって、奥に書き付けられた歌

（光明真言を）書き付けた跡には光が輝くので、（あの世の）暗い道においても闇が晴れているでしょう

【語釈】○手跡 筆跡。○光明真言 大日如来の真言で、一切の仏菩薩の総呪とされ、誦せば、その功德により仏の光明を得て一切の罪業を滅し、浄土に赴くという。明恵は、安貞二年（一二二八）九月ごろから、光明真言で加持した土砂を亡者にかけて菩提をとむらい、病や厄災を除くために、光明真言を多く用いるようになり、その信仰の普及に努めた。○跡 筆の跡。

【参考】◆『歌集』126、詞書「ナキ人ノ手ニモノカキテト申ケル人ニ、光明真言ヲカキテヲクリ侍トテ」、四五句「クラキミチニモヤミハ、ルラム」◆『新勅撰集』釈教・624、詞書「なき人の手にものかきてと申しける人に、光明真言をかきておくり侍るとて」

【考察】光明真言の筆跡から放たれる光で闇が照らされ、冥途に迷うことなく浄土へ向かうだろうと詠んだ。

又或時、物ノ端ニ書付給ケル

# ②④

イツマデカ明ヌ暮ヌト営マン身ハ限アリ事ハ尽セズ

【伝記】卷上・四十七丁表（岩波151頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞・高慶四）○又或時―上人（高秀）上人又或時（慶文）○営マン―営（興a）

# 【通釈】

またある時、物の端に書き付けられた歌

一体いつまで、夜が明けた日が暮れたと忙しく事を行うので

あろうか。身には限りがあり、しなければならぬ事には限りがないのだ。

【語釈】○明又暮又 老いの早さや時間のはかなさを嘆く際に使われることが多い表現。

【参考】◆『歌集』13、詞書「汝身有限事無窮トイフ文ノコ、ロヲ、第三句「イトナマム」◆梵舜本『沙石集』異本歌・189

【考察】当該歌に見られる有限の人生への視点は、建久五年(一一九四)に明恵が神護寺で『夢経抄』表紙に記した『詞花集』所収の花山院詠「カクシツ、イマハトナラム時ニコソクヤシキコトノカヒモナカラメ」(『歌集』111に編者高信が明恵のものと誤って入集)や建仁三年(一一三三)三月十一日に書写された明恵筆の聖教奥書の書付歌「明日モ有ト思フ心ニハカサレテ今日を空ク暗ツル哉」(個人蔵「建仁三年三月十一日夢記断簡」(東博文化財管理システム「画像番号0079418」)では「夢記断簡 明恵筆」とするが、実際は聖教類の奥書の如き体裁を持つ断簡)にも共通する。なお、上記の書付は源承「和歌口伝」の巻末に載る歌に酷似する。

西行法師常ニ来テ物語シテ云ク、我歌ヲ読ハ遙ニ尋常ニ異ナリ。華郭公月雪都テ万物ノ興ニ向テモ、凡所有相皆是虚妄ナル事眼ニ遮リ耳ニ満リ。又読出ス所ノ言句、皆是真言ニ非ズヤ。華ヲ読ドモ実ニ華ト思事ナク、月ヲ詠ズレドモ実ニ月ト思ハズ。只如レ此シテ随縁ニ随興ニ読置処ナリ。紅虹タナビケバ虚空色ドレルニ似タリ。白日カ、ヤケバ虚空明ナルニ似タリ。然ドモ虚空ハ本明ナル物ニモ非ス。又色ドレル物ニモ非。我又此虚空ヲ如ナル心ノ上ニライテ、種々ノ風情ヲ色ドルト云ヘドモ更ニ蹤跡ナシ。此歌即是如来ノ真ノ形骸也。去バ一首読出テハ一鉢ノ仏像ヲ造ル思ヲ

ナシ、一句ヲ思ヒ続テハ秘密ノ真言ヲ唱ルニ同ジ。我此歌ニヨリテ法ヲ得事アリ。若コ、ニ至ラズシテ妄リ二人此道ヲ学ババ、邪路ニ入ベシト云々。サテ読ケル

②⑤ 山深クサコソ心ハカヨフトモスマデ哀ハシラン物カハ  
喜海、其座ノ末ニ在テ聞及シマ、注レ之

『伝記』巻上・四十七丁表、四十八丁表(岩波151・152頁)  
【校異】※当該歌なし(慶貞・高慶四(詞書部分のみ有)○西行法師「西行上人(高慶四・興a・興b・物・穂・東永)西行聖人(慶文)○物語シテなし(高慶四)モノ談テ(慶文)○読ハ「読事」(興a)○遙ニ尋常ニ世ノ常ニ(高慶四・物)遙世ノ常ニ(興a・興b・東永)○華郭公月雪「雪月花(高秀)花時辺月雪○都テなし(高慶四)○虚妄ノ靈妄(高慶四)○又読出ス所ノ言句、皆是真言ニ非ズヤ」なし(高慶四)又読出所ノ歌句ハ皆是真言非ヤ(興a・物)○華ヲ読ドモ実ニ華ト思事ナク「二花ヲヨメトモ花ト思ハス(高慶四)花ヲ読トモケニ花ト思事ナシ(興b・物・東永)花ヲヨメトモケニ花ト思事モナシ(穂・慶文)○月ヲ詠ズレドモ一月ヲヨムトスレトモ(東永)○実ニなし(高秀)○月思ハズ一月トモ不存(高慶四・興a・興b・物・穂・東永・慶文)○只一なし(興a)○如此シテなし(高慶四)○随縁ニ任ニ(高慶四・興a・穂)依縁(物)○読置処「ヨミヲク(高慶四)○色ドレルニ色ドルニ(高慶四)○明ナル明ニ(興a)○虚空ノ靈空(高慶四)○又色ドレル物ニモ非ズ一なし(物)○ライテ「ヲキテ(高慶四・興b)オキテ(東永・穂)○色ドルトーナスト(高秀)○蹤跡ナシ「蹤跡モナシ(高慶四)○此歌即是如来ノ真ノ形骸也……我此歌ニヨリテ法ヲ得事アリ」なし(高慶四)○真ノ形骸也「真ノ形ナレハ(高秀)○去バ一なし(高秀)○読出テハ「詠シ出シテハ(東永)○仏像ノ尊像(興a・興b・物・穂・東永・慶文)○思ヒ「思連(物)○我一なし(東永)○法ヲ一なし(穂)○至ラズシテ不例(興a)至ラズ(高秀)○妄リ二人一なし(高慶四)猥リ(高秀)○此道一此哥(高慶四)此詞(興a・興b・物・穂・東永・慶文)○邪路ニ入ベシト一大ニ可入邪路(興a・興b・物・穂・東永・慶文)○ト云々。サテ読ケル

……聞及シマ、注しなし（高慶四）○読ケル―読玉ケル（高秀）○スマデースマ  
テ（興b）○其座ノ末ニ在テ―有其末序（物）

# 【通釈】

西行法師が常に来て語られることには「わたしが歌を詠むのは世の常とはまったく異なっている。花や郭公や月や雪、すべての興趣あるものに向かつて、だいたいすべての姿は皆偽りであつて、それらが目をさえぎり耳を満たす。また、詠み出す歌のことは、みな真言でないものがあるか。花を詠んでも本当に花とは思わず、月を詠んでも本当に月だとは思わない。ただこのようにして、縁に従い、興趣にしたがつて、（歌を）詠んでおくのである。（これは）紅い虹が空をたなびけばが天空が色づき、太陽が輝けば天空が明るくなるようなものだ。しかしながら、天空はもともと明るいものでもなく、また色づいているものでもない。わたしはまた、（歌を詠むことで）この天空のような心の上に様々な風情を彩るけれども、（心には）決して跡が残らない。この歌は、そのままで如来の真実の形である。そうであるから、一首を詠み出すたびに一体の仏像を作る思いを抱き、一句を思い続けるたびに秘密の真言を唱えるのと同じことになる。わたしは、この歌によって仏法を会得することがある。もし、この境地に至らず、むやみに人が和歌の道を学べば、誤った道へ入るに違いない」と。そうして詠んだ歌

山の奥深くにどれほど心を通わせても、山に住んで心を澄ませなければ、その生活の情緒は分かるはずがない。

喜海は、その場の末席におり、聞き及んだままに、これを書き付けた。

【語釈】○西行 元永元年（一一一八）―文治六年（一一九〇）七三

歳没。院政期―鎌倉時代初期の僧侶歌人で、『新古今集』に九四首の最多入集。同時代の歌人たちに大きな影響を与え、明恵も西行歌を好んで受容した。拙稿「明恵における和歌享受―仁和寺と西行の影響」（『国語と国文学』平13・7）、「明恵の西行歌受容」（『和歌文学研究』83号 平13・12）。○所有相 所有は「あらゆる」、相は「外面的なすがた」の意。○虚妄 虚偽り。真実でないこと。○真言 仏や菩薩の真実のことば。○縁 認識の対象となるもの。○紅虹……蹤跡ナシ この部分は⑦詞書「亦正繩床ニ踵ヲ結ベル間、眼ニ色ヲ見ズ、心空ニ境寂リヌレバ、風月ノ興ニ唯立出タル時、假ノ事ナリ」と内容が重なる。↓⑦【考察】。○白日 太陽。○邪路 よこしまで誤った道。○山深ク…… この一首、前の詞書部分との繋がりが見えたい。『新古今集』雑中では「題しらず」で載るが、その他は『西行上人集』の増補部分に見える以外、西行の家集類には見えない。第二句「サコソ心ハ」が落ち着かない。本通釈では独立した一首として読み「どんなに心が通つても」という意で解したが、「サコソ」を「そのように」と取れば贈答歌の返歌としても解せる。○喜海 明恵の高弟。『行状』では、建久九年（一一九八）年秋に初めてその名が見え、以降、明恵のそばに仕えて修行した。

【参考】◆『新古今集』雑中・1632、詞書「題しらず」、第四句「すまではれを」◆『西行上人集』670・雑、第四句「すまではれは」◆文明本『西行物語』75、第三句「かよへども」、第四句「すまでこころを」。

【考察】当該部分は西行が和歌即真言・仏像観を示すものとして従来多く取り上げられてきた。しかし、『伝記』諸写本のうち高山寺慶長四年本には、その和歌即真言・仏像観を示す「又読出所、

言句、皆是真言「非ズヤ」と「此、歌即是如来、真形跡也……我此歌ニヨリテ法ヲ得事アリ」と「山深ク……」歌が見えない。高山寺慶長四年本が古態を残す可能性の高い伝本であることと上記の二箇所と前後のつながりがスムーズでないことを合わせて考えると、これらは後代の増補箇所と推測される。この詳細は拙稿『梅尾明恵上人伝記』における西行歌話の再検討」（『国語と国文学』二〇〇〇・四）を参照。

〈付記〉貴重な資料の閲覧・複写をお許しくださった慶應義塾図書館、興福寺、東大寺図書館の関係者の皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。なお、本研究は平成20年度科学研究費補助金（若手研究B）による成果の一部である。

\*Notes of Waka in “Myōe Syōnin Denki” (3)

\*\*Tae Hirano (Japanese Language and Literature)

キーワード 明恵・伝記・和歌